

社会システムにおける事実と言説の境界：信用概念をめぐる

景山 悟

本報告は、「信用」概念を存在論的な補助線とし、コミュニケーションからなる社会システムがいかにして作動し、事実と言説の関係を編成していくのかを探究する實在論的試みである。

M・セールやN・ルーマンに連なるコミュニケーション論の思想を前提としながら、J・サール（制度的現実論）やT・ローソン（批判的實在論）の社会存在論が抱える静態的な限界を検討する。その上で、W・V・O・クワインのホーリズムを言語実践の観点から徹底し、H・パトナムの實在論についてその認識論的、社会学的意義を再検討する。さらに、A・コージブスキーの一般意味論における「抽象」の原理を拡張的に継承しつつ、G・ジンメル『貨幣の哲学』における「客観文化」の洞察を、社会学、システム論、哲学の諸領域を取り結ぶ重要な示唆（結節点）として位置付ける。あわせて、技術・技芸・制度・制作・生成の概念にまつわる社会存在論的問題や、M・フーコーの言説分析における教説システムの問題等についても考察を加える。

本稿の最終的な目的は、社会システム論による社会存在の記述ではなく、言語システムによる統語論的な作動が不可避免的に生み出す境界問題を契機とし、事実の定立において前提とする意味論的規則そのものの変容を学知総体の自律性としてとらえることができるかを問うことにある。最後に、定型的事実の研究事例を通じて、学際的対話の重要性を確認する。